

- 2:13 彼らが帰って行くと、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」
- 2:14 そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、
- 2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであった。

＜説教＞

東方の博士たちは、不思議な星、否、「不思議な助言者、力ある神」(イザヤ 9:6)であるひとりの幼子イエス・キリストに導かれてベツレヘムに行き、捜し出したイエスをひれ伏して礼拝しました。彼らは幼子イエスに向かって「自分たちの永遠の王、神、救い主」と告白し、自分自身をイエスにお献げしました。その彼らが〈夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行〉きました(2:12)。ひとたびイエスを礼拝した彼らはヘロデの命令よりも神の命令に聞き従いました。彼らにはもはやヘロデの卑劣で罪深い策略(それはすなわち悪魔の策略)と関わる必要はありませんでした。彼は知らずしてヘロデの「共犯者」となるところでしたが、神が彼らを罪と悪魔から守ってくださり、自分の国への帰路につかせてくださいました。

その同じ神が続けて、幼子イエスとマリアとヨセフをも同じように罪と悪魔の攻撃から守り導いてくださいました。それもまた〈見よ〉と記されているように、不思議な方法によつてでした(13)。東方の博士たちは幼子イエスやヨセフとマリヤの前からいなくなくなりました。しかしへロデ王とその悪巧みもが消えてなくなったわけではありませんでした。神、イエスの敵対者とその邪悪な策略はなおありました。そしてその罪の思いはいっそう大きくなり、悪魔のわざとして実際に表に現れ、イエスにいよいよ向かおうとしていました。それは幼子イエスを徹底的に〈捜し出し〉て〈殺そう〉という、執念深いものでした。あの東方の博士たちの、または羊飼いたちとは全く正反対の罪深さ、熱心さでした。

神は、人の隠れた、密かな、誰も知らないと思っている人間の心の内の思いを全て見ておられ、知つておられるお方ですから、ヘロデが幼子イエスを〈捜し出して殺そうとしている、密かな、邪悪な策略をすべて知つておられました。それで神は、ヘロデが行動を起こす前に、ヨセフにそのことを知らせ、ヘロデの策略から幼子イエスとその父母を守られました。主なる神の使いは「立ちなさい(起きなさい)」、「幼子とその母を連れなさい」、「エジプトへ逃げなさい」、「私が知らせるまで、そこにいなさい」と立て続けにヨセフに指示命令しました。

ヘロデの魔の手から逃げるはいいにしても、なぜ〈エジプト〉なのか、ヨセフは不思議に思ったかもしれません。エジプトはその昔イスラエルの民が奴隸として苦しめられた所です。ずっと異教と偶像礼拝の地です。せっかく神がモーセによってエジプトの奴隸から解放(出エジプト)して救ってくださったのに、後で何度もエジプトへ帰りたいと不平不満を言ったのがイスラエルの民の罪でした。なのになぜまたそんなエジプトへ自分たちがまた行かなければならないのでしょうか。また少し前には皇帝アウグストゥスの命令でナ

ザレからベツレヘムへ身重のマリアを連れて旅をして来たのも大変でしたが、今度は二歳ほどの手のかかる幼子とマリアを連れてというのもなかなかに大変でしょう。エジプトにいれば本当に幼子イエスの命を守ることができるのでしょうか。ヘロデからは殺されなかったとしても迫害されないでしょうか。見知らない土地での生活は大変でしょう。今の自分の仕事はどうしようか。食べていくことができるだろうか。色々な恐れや不安がたとえ一瞬でも心をよぎったのではないでしょうか。

しかしそれでもヨセフは神の命令と同時に約束を聞きました。それは「私が知らせるまで、そこにいなさい」とのことばです。つまり、必ず後に「私の知らせがあり、そこ（エジプト）から出ることになる」という約束でした。

そんな神の約束を信じてヨセフは（そしてマリヤも）神の命令に従いました（14-15）。なお、「連れる」（13,14）と訳された言葉は、「迎え（入れ）る」（1:20,24）と訳されたのと同じ言葉です。あの時ヨセフは神を信じて御使いに言われたとおりにマリヤとその胎のイエスを「連れ、迎え入れ」ました。また「逃れた」（14）と訳された言葉は、東方の博士たちが「帰って行った」（12）と訳された言葉と同じです。神はヨセフたちをも、東方の博士たちになさったのと同様に、夢の中でお命じになり、ヘロデの邪悪な策略から逃れさせてくださいました。どちらも神が助け導き、悪から救い出してくださいました。

このエジプトへの逃亡の出来事は、イエスご自身が、幼いときから受けるべく定められた苦難を、父なる神への従順ゆえにお受けになったことを現しています。「ユダヤ人の王」イエスは、かつてユダヤのベツレヘムの宿屋にいる場所がなく、家畜小屋へと追いやられました（ルカ 2:7）。今度はユダヤの地にもいる場所がなく、エジプトに追いやられことになりました。そういう、罪人による冷遇、無礼をイエスはへりくだってお受けになられました。イエスは〈幼子〉のときから父なる神に従順に、へりくだって、ヨセフ、マリヤと共に〈エジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた〉のです。

このエジプトへの逃亡には神のみこころ、ご計画によるのことでした。それでマタイは「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。」（ホセア 11:1）という預言者ホセアのことばを引用して、〈これは主が預言者を通して…語られたことが成就するためであった〉と言いました。本来このホセア書のことばは、「神の子、長子」としてのイスラエル民族（出エジプト 4:22）についてのものでした。エジプトで奴隸として苦しい生活をしていたイスラエルの民を神はモーセを通してエジプトから導き出して解放し、お救いになりました。幼子のイエスもヘロデにいのちを狙われてエジプトに行き、ヘロデが死ぬまでそこにいて苦しい生活をすることになりました。こうしてイエスはご自分の民イスラエルの歴史を、罪は別として、ご自身で人として繰り返して経験してくださいました。それによってイエスは私たち神の民、人の苦しみを（喜びもですが）ともにしてくださいました。イエスは本当に私たちと同じ（罪は別として）人となってくださいました。モーセに連れられてイスラエルの民がエジプトから出たように、〈ヘロデが死ぬと〉（19）ヨセフに連れられて幼子イエスはエジプトから出られました。こうしてイエスは神の民の「代表」となりました。

と同時にイエスは、神の民をエジプトから導き出したモーセの役割をも果たされます（その場合、ヨセフとマリアがイスラエルの民の代表となるでしょう）。ヨセフは幼子イエスとともに、イエスに連れられてエジプトを出ることにもなりました。イエスはいわば第二

のモーセとして、モーセより遙かに優った完全な導き手、救い主として、私たち、神の民として召された者を、悪魔と罪の奴隸支配から救い出し（出エジプト）してくださいます。

あのエジプトと変わらない異教と偶像礼拝の地、日本にあって、そこから私たちを呼び出し救い出すために、神はイエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。イエスは私たちとともにおられ、私たちを導いて、ともにエジプトしてくださいます。イスラエルの民と変わらず、神に対して恩知らずで、ときに古い生活に戻ってしまうような罪深い私たちに、イエスはなおもあわれみ深くあられ、ご自分に従って、ご自分とともにエジプトするように、神に立ち帰るように常に呼びかけておられるのです。